移書數注

紀行

十三

曾4
775
225

曽イ門
775
225

群書類從卷第二百卅九

紀行部十三

検校 保己一集

熊野道乃記

仁和寺僧正尊海

天文二乃年神無月後の四日に熊野詣とて
はるばるとのぼりて申り侍るふるまひ都をたちて
出る初の事をわるくなくなくうるはしく
途坂の山とおぼゆるとこそ
岸の今と岸あり山坂の実ゆんたちらぬ際の月未
はらさぬ乃雲とこそ思ふ年をうらみなる法
乃師あとふ稲いまさん事と思ひく

今日りや四ゐと思ふかの浦そまはしたりたつの乃宮
初ゑ乃山の東坂初ふくゝ白雪ふりて旅人も出さりけるハ
雪もつまれとはれく心くるしき

橋長谷乃ぶたうたりたる深草春の白
雪ふりへゝり大ゐ元寺雪紙ゝく富士山と思ひかて

源乃うへの初ゐ元たる雪の初もけふさまと思ひかるふ
雪たる紫たる初乃うらたる白道乃人ひとりたる春の
雪ふりしきまはりたり初ゐ

さゝなみや年ゐ山乃ふたる沖津舟
漕出たる山とゝれゆく雲　盛親
とりかゝたる宮小芦白川高さゝて　[illegible]

高雪乃里ふる人の雪ふりて
初出ゝく新潟たる雪ふりこゝ山乃今見
ぬく海とゝ白里ふゝく道ふゝれのゝハ鉾いゝ出
出ゝも者たるゝ雪乃年ふるまハ

出ゝ世ゐ人海雪乃里たゝ高ゝ人ゐ世ゝ
初素たる潮ふゝ雪りて世たる初ふさ作りて
う芦素ゐ世さ海初や辛今波ゝりと神ふ初して

酢井たる里ふゝく渭ゝ
ゝけまゝこのゝてゐゝ二日ゝひゝふさゝ井の初さ作け
日ハゝりゝゝ作波ゝ嶽ゝんをハうりくりるゝ宮
乃ゝけゝみゝゝく

宮も内宮八月朔日はしめて須磨や宿に候
不破の関屋乃あれにけりとそ見ゆ
いつもしくゆかしさ見ゆらん山嵐よ不破の関さへ吹はやけむ
醒井乃宿に泊りて杉乃梢に嵐さはしく鈎むか
らしれんとむかふにゆかしく
小野乃つけのを林の露にて殊に乃泉井乃水汲みかわ
いかさらさ山乃擦井乃にて人の世にくい一日住居し侍りし
侍りし人の世にあらかくありしかといひ侍りとも
ゆかしけれ侍ら侍りてとありなと思ふにおもかく
こころありしとうちまとん
世にかゝる人の宿を尋ねまほしく候かなかなと

尾張乃国やうつし人の家ふ一夜とまりし侍りて夜程
にいたらむへしと行きつつ旅あらりけの酒なとたうへて
さかしく飲むれ侍りて
おほさうやかなさしひて一夜にいかゝて横たりのて
てんくうくほくして人の野とゆきて山たちあらしゆて
いふせくおほしさき見ゆ
あ里さむやさらゆまつゆくあくれく夜の風もよくみるくや
あまた山とて人の家にも泊まりて旅宿いとさひしれ
ゆ山乃さくら春やらんはれさとすゝく枕にうく
矢作乃里過侍りて夜に泊りて侍りてよしいかなこと
あさなさなよしの半ねりひかく

もろ袖やミ紀の里にあそへる事にし叙しおもしろし
今橋といへる所に由りくう経世の事ともおもひ侍らん
狩弟
人今ことふ南ふるこゝハい行へる経世沢の行ちの両橋
さ江の出流衣の橋のあたりに由りて
りまさうかんも慥の森の杯と南の橋にわけるや
引君にといへる所に由りて
ちるへして被衣むく南の花とハ萩や紅葉の錦えよ
あ南ろふ花の人の行きハさこに前をてちらしさむとや
さゝえ侍こし道芝居士あるゐ南やすまうて被笛覇ふ
南して霜月廿一日小

いろかして月に寝ぬ覚の声の宿　道芝
さえく風みさむ川の網あれ
かせのふをともや南の端のころく　文永
山月刑部か補館わく一夜無行
浦かを夜きゆかのやゝやゝとわされ笑　道芝
冬にひろあるやゝの霜の枝　等杭
雲さむ人月ふうくひさ方の神く　通直
都まく剥し人こ行雨にくくり吾徐のり侍まして被
扇所小りて松風さむしく吹きまして
なさしく今よいのふさときへハこてふるかり松風のぬく
被露主人

秋のしほれてたえたらんかなしさは夜半の秋に
庵を結びて山家に住みわひんとて常にいひ給ふ
人あり

秋よりもまさりけり奥山のすまひはさひしさもかなし
つれ人あるかな

秋そしんのきぬかはすみなれて世をもとゝめぬ
里より都のうちに立出ける道に京といへる所に
庵をむすふ人の里有きはこにいすみて都も
すてぬ人ありこゝかしこ作りて
著れけるあり
おのれし家の住みし我まへにいひつる後には何となく

心のおくゆかしくて
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
小夜の中山
[illegible] 世の中山
菊川乃前 [illegible]

冬うれの山ちかくもうつりて新井の関の名
遠江乃里越ゆくにうらうへの雪をかけまくも
恋衣乃とうへの里にあかくしぐるる紅葉の下たち
うすの山をこえわたるとて
ひかり重うつる月のかげ玉の簪うしひ石やみなん
大井川をこえ新乃ゆうにあまたたまうへ
ゆうしくこの
新乃ゆうふ乃大井川流れ入へきりやする
木ゆうしは雲はうくすまこふ雨に宇治りはふ
雨りて月乃新さもまとくく
川ゆきはゆくゆくやまはの月さうぬ木うしの表
ちかう山小河乃大井はあまたとれへまうて
うへうさはみう雪うすくうちうとこの
うう衣川さ山にとうかる附馬高原下夜かうん
主河ゆくうしうも今駿河ゆく富士とれてな仮
ちうて
ひさ名ゆくとの諏訪ちうもちう雨うするゆくのふ
三河国八橋乃ゆ一とやふかく衣乃ゆうあまをふ乃ひ山く
武蔵ゆ称一とうかる乃ゆうあうるかゆ一衣のゆり雨も
鳴海乃浦にあく月とうく
山のうちとうあうゆとうえて月ふ新乃の海ちうあり
里橋雪うう仮乃新ふうはうとくして

春のよう海ハいくまて見渡の和はかりにふ成浦のむら火
舟人らん來うれしく
ら金へるにわかれ成に出わ入る霞のこなた波かりむ八
春雷もいへ方観まく
ゆるとらく波うちも作世の春の宮の庭の木のかけの田の鳴代
十四日立春あもと八
山かけの霞もかね南より人のゆけは春や立年
是よりはやりぬきて道芝離方は短冊を短尺よく
とらり出ふ
部のあるえやいやしくも持りとうん先の木の家のくふのかれハ
歴ハく便よりへし

花の所に主また（ふさイ）風もの出（友イ）舟のあふをはやくもしたのめぬかかれ
此日よりつへくとふかまし（おイ）人このは方へ
切りハ主し旅よりもうれしり花あ雨にかまけ前の下は
酒はこひし手向のとく窓にけやし紀乃西向とこう南
きゝ人かつて扇く伊しき八面もの月をわけ竹波の月宮の宮（しらイ）
是よりはやり行の八友枝長閑寺といふ所八者往る
いまはかくりし主よりぬきもハ和漢乃一折興行の筵
夕雨の空もあもと八
ゆあやらてきれや春の月乃ふ家　喜卜
友三　蘇蔵　寒　九英
杣氷　茶　葱月　善徒寺　兼芳

又ゑより至江天芳道芝菴へうつりて年とし
待る小明年待二日子の日のまつハ
今日こゝハ八坂へ乃小松ゆうゝわゝ孫の日に世とひたかゝ
岡七日に若葉乃類ゝく今異行
かへて世乃ちゝのゝかゝたるくゝ嵐やはりそふらん
十二月十五日の夜松中出つ一夜清月乃樹ゝ せく侘れて
あけ渡乃くゝ雪ゆうへゝむ山ゝゝ
月に色ゝふまれ乃宮けさ　中
庵ゝ子ゝこゝ渡ゝ乃ゝ
岡ゝ二百乃秋月待に又一折
明ゝ渡ゝゝ清ゝ末の松　中

山風ゝむゝ峯のあさけを　義
ゝゝ雲ゝわゝゝゝ月乃新ゝゝ　春下
清ゝ乃関ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

右尊海僧正紀行以本四軍本校合了

天保四癸巳年秋九月十一日於八代縣上松求麻
中津道奥援峠宮山中邸書留ス

中村直道

むさし野の記

小條氏康

天文十四年仲秋の比ゆきとうとて海
月ありひさしきゆめの事なれハ人くゆきくらし
侍まくに小雨うちあそびとくあるくに
うり侍ぬ家にしてうら家もなうなく
ふかまりてあるに侍ぬるとなるめハ
情のよりに四方をかこみ侍ぬ
とてもやうもめ侍ぬ波ハたちさいくとをれし
て鶴の声ハ波のいそへよりあるをかるめを祈ふをや
大海の海を引くに外原ハうさ世を御るとうを眠ん
ぬ侍ぬ庚寅年ありく仕ふまう

て考ふるやうなる八ツ也あり海りにや成ぬるなるなるは
なるこの海の方法あるよりて
なるこの為八も法師の宿山いのる所り八方絵をふ
法くこの方こと法者くの山八中法方を面大島法左寺
古跡を御見あくれを有法方小松井の左ふ三面
弾正忠氏宗の高家小一夜とあるして引小面を
方兼こ方さ方御しいふ
さ法ふ方ふ方ふ面方法法の殿いそて引法者の左
法を得面あさ者ぬくを入くを引ふ当りい山て
以法ふ方う弾八甲斐の山小いちを面ふ方ヒ
方へ方うれう引方法ふ勝法く京引ね

東叡加賀寺西元山不方修を方法称くを方
くを法事ふ方ふけまハ山海方物物物を
法こ饗亦法法る法不二百匹方して
方れう引方郎をうり法くを下を法引
をを方くを法ふを方法を法を法を法を方
寿法ふ法法る引法ふ方法を法ふ方法
を方ふ方ふ

引を法法法くを法を法引法ふ方法法
いふ法法方法の方りを方法引法法法
引方を法の一を方へふ方法ふこれを
へを法ふく法世の方法人法法法法ね方法の一り

あくれば八月十五日あさ雨いとゝしくふるに
かゝるこゝろすまうせるに馬にのりて
ものこゝろやすからぬさうの堂にまゐりあさ雨をもけ
んとゝあるもこれなりて大井の庄をとはやうく
さゝ田川まもつきぬ河つゝにぬれぬまゝにゆきて
のりてゝあるゝとあるさゝ田のつゝみをゆくに魚をとるあり
さゝ田のつゝみをゆくひいとゝ
松尾殿のうりに松ありあるに人参のあるをうり
ひいとゝ房上條まちあるをとりあるに
荷西乃方に浮無寺に長老に八十餘にて侍る
う迎ふいそられ寺門にまちり一前出家さうゝ中

これをれを河とゝりのぬるに一前にのるり
ぬれに入風はゝるゝ松風入琴とゝ山寺
とゝひいとゝ
雲間の月をけさ見るに
あくれば珍とゝあるに人らんとゝ中に通ふさうゝ
月こゝろ物こゝろ物つゝひ月数つゝとゝ
八月中旬にも成ぬ出家にまゐりつゝあけぬ

右武蔵野紀行以枝素拾葉集校合了

癸丑秋長月十一日於松本ヶ山奥写之　中村直道

東国陣道記　玄旨法印

二月廿九日尾州熱田に陣す社務検校の家に
とまりけるにあるしの僧社僧寶蔵坊なりとて
雑談の次南社の周八殿宮八月本武尊なる事
物語ありて後家の宝ありをれば
うらへとんいく東の稲の穂
晦日参詣まうして御門の花の盛なる
御門の内の花の盛なるを人に問なるかな
三月朔日矢はぎ川をわたる
見てをけるうらふの夫なる川まいて水をたゝえ
四日遠州三ヶ日と云所を行い見りも富士の高

人のいひきをつゝしみ沼水をたゝふ
ゝふ所にいりてこれを有みたをたゝふ
方角もいまだ雲に隠れるゆへとゝ
言ひよ所中山ちゝ紅山口いふ雲に高ゝ月ま
ち出る雲の面に見ゝふ
神ゝもかゝる所の絵きて言葉ゝ作さ所中山
八日ゝ月乃山ゝ
山ゝ雲ゝ思ひをゝ月乃山ゝ雲ゝ作
御山をゝ川ゝ人のゝ
人数ゝ出れゝ月ゝ雲ゝ海の雲ゝ
籾ゝ数府ゝ富士ゝ

方面ゝ雲ゝ富士の雲ゝ
府中に遠方乃中に
あ面の京ゝ雲ゝ雲ゝ富士の雲ゝ
山田京居陣乃村民法より出代の絵府をゝ
宇都乃中ゝ
ゝ花をゝ
一如院より山中にゝ一柳対乃ゝ
あゝ乃ゝ絵乃ゝ
ゝ
いとゝ乃ゝ奥ゝ絵乃ゝ一川柳ゝ
同一如院ゝ山居陣乃ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六月十一日鎌倉足利乃[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十二日加[illegible]

[illegible]

[illegible]

上総國[illegible]

廿二日

[illegible]

古織より[illegible]

送られ[illegible]

[illegible]

水無月晦日御[illegible]

陣取の山の麓なり後方に茶臼山あり

三月廿一日初めて雪降る

七月十五日相模の国小田原城攻落日も早月の出

甲州をうく出ひ行りてあり小山とうえく

竹の下くいふ里に出る竹の下道

十六日甲斐の国河口湖いふ所にあり

沖場とこそく甲斐に行くもの乃ふ所なり云

なり

三月の中ごろ出さきいとまつ一日あへ雨の降ふらる

雨乃やまさりての仮とうやりとく

秋の月さしてのぼる雲の山とやをそ行沈

甲斐なく雪乃所なりしに

雪の所に月乃山こそ風とく都

美乃山宗寿さしてうり見こけ也て

頼むを名とすから涙や藤をうちひてうえる美の山風

廿一日海道乃社ちくさ三郎といふ所に有りてあり

つよ藤こそとく湖水く月乃うつるをとく

さこの海や秋のよるる月影ふ水のうもれん能して

廿一日本宮乃国福島いふ所に日たくつさく所

見物せ〻にしてある山ちかいを入くるを八親ふ

美松山こそあり寺内ふ行て易ふ行ものね月し

院宿乃おもてもきよく物さびたる寺号ハ
興禅寺とぞいひける江羽黄門草津湯治乃
剃南化和尚ト有又越後直江城州やらにまかる
時聯句なしけりぞもよしけりて主此句をかく
らもけり但小梅花乃席にいふ宗匠わりしろよ京
氣をもいかれもまたしもらくいとく即座發句以
して入韻不分をしに

月乃ころ梅花のもとのあさし淡月

旅亭砧響冷　　經李

こ此ありくに本尊の名をしと殊勝ちくのおり
けりに月の河上にいつりくするを聞し程に音わ

有りて秋乃さ自ハいとさうら也

世中移あやう経らもくも水のなかれに行る床そのうけとし
洪州とのおりけりふ見え侍く御山信長公御代みう
治入洛乃此使ふたなりく見えれし不和のまた
いく年ことのく御山の一門も亡ひしもかのくあらぬ
禄余へまかりて社をまつりひさし御田山つくる沢
見物にわ侍しに田をあれのとく宗匠からりまくそ
急にいそて御らんや行そふ秀あり田邑のいその夕陂
霞山円囲あつきて見やらく

行く年のや風のあらう乃方よ家の山乃西新らう之
公年根元柳第亭太府へ為ト車行りてきる

[illegible]
被送給し給ひ

元葉乃さくらもめくらひ八きさ初雪のあやつきし
はなたかの夜寄合院私宅へさつ給らをし付給ふ
し東大寺法華会のさうし出しえうて法さうし給た
つとめくさ給ふ本色うさ紙折ひ給ふあやまりふ
さうし給きハ物あるを和やかし給りく清泉寺
けるふ左し法さうし給ふ

元さ法さ人の手たるを東寺のさらたのあやゆりけて
高野ありて尾別ち関白殿帰洛のさきさきもとも
ゆくもらせらるをハ

堂門主

[illegible]
[illegible]

和歌

うしかさも[illegible]鴨のしの[illegible]

きんゆつ[illegible]

古東国沖道記以銅板蕙行集校合了

天保四癸巳年秋九月十有日於八代郡松琢山中

書写す

中村直道

蒲生氏郷紀行

天正十二年二十七年前関白秀吉公入唐
寺の御ひいきんとものたまふに日乃りくの武士
乃こうかく出仕しいへるふ陸奥より立ちけるに
白河乃関をすぎるとき
陸奥の高倉も秋の色にいろこそあらく
とうみて知るくゆくかとも白河の関いまうこえあく
くこうの影く川乃とよ郡の名をけるをいろよせ身ふ
うれるん紅葉乃上人とたうへせ郡よりいふを少
商者のや新古今にたのへ清水ろうく板うけ
と作りしをたりひいて

今もゆく末をかなしみ柳陰にまどひ入せ給
ふらんかなしけるほどこそ八幡殿の御ていい
所ありくれハあまりに人目もたくはさひしうらつる
まくゆくとひつゝ称くく

世中に歌ハ行とうわ沢の水なきもなく手やへぬ人さ
かりといひくて行ふ柳沢乃面影よつゝ分里人
の出ハらしにてうねとひくれハ蛙しにく者人を
忘ける人のひかしく成しを柳うゝやうの事と
かゝりとこゝてあそれよおかりわくぬをハ

これやはさの面影ゝるにをいすへ人のこゝあるをなる
とうゝてうわりつゝゆくに上野をもすぎく信濃に
入ね浅間ハたけくゝかゝるのうつをゝく狩人に問ふ
人の事とかりひてよゝける

ちかのかる浅間ハたけくもいふ狩のこゝねとゝ人ハ
ともの〜行ふ初〜国乃名高といふ所とゝ人ハ
し宮ある彫ひとつ名清水をいのゝ所とひ行を
こゝてかんうゝ行軍といふ詩に人ハ人ゝ
あゝさりくれもしゝ里の名ありけるものゝ
ありひて

かさりくゝとゝもてこゝ所そのちや宮ゝの詩とこゝ行里
柳ゝくくてこのゝ山ゝる井といふ所ゝ称して
ゝ称する所の彩湯乃あゝそ新もたる井の物ゝ

ともしくや我すむ柳にさへなつかしけむこと
江の里に入けりぬ家は我生まれたれは猶いとな
つかしう思ひける
都ひとや今の世に宿のかき旅なるなとよそにみんとは
思ひつゝ侍りけるとよむや旅なく京に付く
なかくと思ひし旅も今はなや心のおくは猶旅をりし哉

右氏卿紀行以加賀美遠清本校合畢

癸巳九月十一日於松永ヶ山中写之

中村直衛

東路の津登

宗長

白川の関見侍らまし事とし月ねかひ侍らん
衆をとう過しにん此秋と思ひたちて永正六年
文月十六日に思ひ立て都を出侍りぬ於八
州府の講義訪茂加賀守安元一折とてこし
うは辞しうるくこし発句
風そよいまゆりしん葛葉哉
わか庵をあつかるといふ者云ともかくもいひ出されける
此程は旭寺と云山里にてまし　十九日に
発ちて国府より出て沖津の鈴を出ちより

待り亭主左馬の右衛門このし所新造して和
きとまれとゝ所ゝ侍りしを無用と
月の秋は箱根やゝ義うく亜侍
ゆくらしき箱を分し侍るとうし
沼津といふ所長徳寺にて彦所造
松ゝ元ん年ゝ高砂の秋は庭
浮嘗う原と書き箱根路と成て赤松の國小
田原は箱ゝ一日医師しゝ茅渟ゝや雪らふゝ
ゝ数句不定ゝ
紅きりは いつくゝ
ゝ坂ちうき 桃望ゝ侍るゝ

八月十一日ゝ出ゝ国うゝ
江戸陣西岳氏宗此寺の鎖ゝ兼てしも白川
の芝ゝ所ゝ中ゝ侍ゝ
十五日ゝ庵ゝ速ゝ出ゝ
きりは まゝ和ゝ入
此山ゝ国ゝ諏八甲斐国の山北ゝ
ゝきてまゝの沼山ゝ
山ゝうき所ゝ箱ゝ
ゝ所ゝ山寺ゝ
ゝ方ゝふゝて
嶽ゝ

むさし野の景色をうりし
四十五日氏宗かの〳〵恩政寺にまうゐ初うち
かの〳〵へむさし野の萩薄の中をとをりうそ毛尾
孫太郎顕方の館をたちうくとりふ寄よつまぬ政
宗馬上のうしろ姿をひく
むさし野の春はつきりハ行もうの紙の風とハ一ら川の深
水の清流後の国許橋まゝ武蔵上野の侍姿の
ゝ〳〵ゝ〳〵いつこも月うの形をとりしうハ武ゝ秋ゝて
四日ゝけて出井清兵ゝんの茶ゝ一ゝ送る
ゝ入てゝゝつきぬ明る弥利根川の水流りを
上野の国新田の方ゝ礼部尚絶頂遊行りて今ハ
静寂うゝ国境ゝ五六日逗留せひくゝよ初ゝり
新ゝて神ゝ美るつゝき野山うゝ
うれゝう半ひくゝ行半ゝうゝつゝて高ゝ川の行ら
ゝしもおりひ三ぬる所ゝらをうゝ高ゝ入静
寂の絵句ゝ
行きゝりゝ高ゝくゝまゝ見る小萩うる
萩の絵句ゝハ初ゝうゝ行風情年高ゝ侍ゝ秀美
紫の巻ゝ中ゝ絵行きりゝ考ゝ八野絵ゝのゝ
野ゝ小萩ゝゝうかゝれる所無行をうゝ高ゝ
二日ゝうゝ行日国絵和ゝれゝゝゝ年のゝ知世
岩松の芭場ゝて西ゝ

むそうきょうとゆうらの萩の月ゆうべ
祖光とて紫野に住有ける僧一首して一折
侍りしうと白川より出ける田舎ものの
風流の業とて萩の家
小倉殿きょう第一静寂より別荘東北にてらもて
下野の国佐野とゆふ所へ四ちら定利の学校み生ち
より侍るハ孔子の弟顔回の肖像をうけて諸国
の学徒ゆうへと頒けるとて我いうしかく
うハ侍らまとん侍り法南家四跡鑁阿寺元一
て子孫とゆふ坊よりて第のこの源よ分ハ
こうまとゆふ坊ハ世俗主そとえしへ人

ありかしく祈りかくて旨こうとて連ゆ侍り
有けゆらしちうやい寄す柳うか
てうとそいうとそ笑て侍るりを備て東光院
威徳流して奥州
風ハ和うし松よりく言萩の夢
杉の業よ用も有ぎ形こ武
佐野の鈴よ又五ぎこうとて會侍り小児音丸連
分器量ゆる侍り宿の侍り山之筑紫る與行
白をとうい業をへ白分萩うも
光て下業梅のとやヤへなん
佐野小太郎巻綱幸こうして

[illegible]
その故ぞらしてたる朝のうへ　同越おるえ糸
してえくしうるもあり此不八分
業をその間いに孫とよめり舟橋もこのかうり
年〳〵兼載八坂宗芝五十里斗備て下総国
古河にいる所不方のてをて江戸屋にて年
京の名醫そのうくをて療治かりあるかとして
半ひく中ういしに侍り中風をて手ちりひ左
あるをかたるゆいたしに見より美姫にい
所ひ横を刑部少輔鎌世かひともかはを連
分かりうちこの部執筆をる

取分部のを記る立寛の紀うか
此朝の晩方を宝八雪ちるを深をかれ亭
主中務少輔綱房うれを体ひえをまうを
まををうちををををひく行をこれ
を紙ふりいをうりふくて紙をし不雪をしよ
紙きりや空のやしまを夕をあり
ゆふへのをりををの紙筆ををおを侍るを
うを行ををを中へをして
雪の空行やしまを紙の色八雪を和うを夕綱を
へをを行ををををしを此八雪をり日光山へ春う
ちを侍をうをまをいを不綱房父筑海を綱重の

鈴ばり一帯にて合はのいとう宮まも直し
かくし給ふ朝日光へ社ぞうへ出てきちのいそ
きはまる

和うぞうん人御髪山の秋の霜

雨宮ハかうりしらともはりかくるを謝
ゝゝゝゝゝゝゝ足柄山のかゝとかれて綱重子
ひまと彫ひろく常ゝる人かゝとそれとかゝし
侍ゝ鹿治より寺まてハ五十里ばかり
雨ゝ人馬のはうゝひゝとゝくもはらはしやや
寺はゝゝゝゝゝて雨くゝりいてゝるゝとゝ
ゝゝ坂本の人家ハ数とかうゝ繁きて福地

ゝゝ坂本より京鎌倉の町ゝて市のやし
ゝゝはらかゝる岩ゝもはゝひてゝちの宮ハ
寺はゝまはゝゝ松杉ゝ寿ゝ山ゝ桔梗原
の峯岩ゝもかし左右の谷ゝ水ゝ川流
出ゝゝかゝ合雨の岩のはゝまゝ橋はゝ四十
丈ゝ滝ゝ出ゝ中とそらして柱ゝ出ゝ
尺ゝ出ゝ山茨の橋ゝ黄ゝいひかゝ出ゝ
かん此山ゝ小茨生ゝ芋ゝかゝ山人はる岩と
尺ゝゝそゝ日の入れの宮ゝ箱根鏡岩ゝ
きぬやうて御宮座福地ゝて連ゝはり
世ハ秋ゝゝきはゝ三山うか

當山常住不退の地なる事とのへ侍る事とおぼゆ
入て罪ぬ軍茅ハ児の十六七ばかりなるそ一
座法日は毎も法うらを侍りし宮増源之丞と
いふ猿楽おぼりおひて教ゆきまを
ひ給てうまひ箱なるとうまひ
教のちま法うを世とと相のいかうけん法うを日本
堂権現なして滝の尾といふ別所の滝のとと
に不動堂ばかり滝の上に横門を廻廊ばかり
うおきり落まる河ばかりまつかく風岩うに波
いつもと和さうし寺より女峰町の法と大
石とせくめるなへてのちるなを石とさて清水
と称ばかり谷くとえ和歌きハ院く僧坊ばかりそ当
坊ばかも侍りおるん中善寺とて四十里ば
うへは湖ばかりや此寺ばかうの宮法と六十
里ばかれハ横ばかりいふ而まるなをとて綱重入国
をして連ばかり

遠く義一三枝う宿の唐紙

もすば帰程の三枝の唐ばかりやうやのとば永
やううんとおもひ出ばかりきてのとと家一うの
宮へ行新年一雨風強ばかりてぬもく日まとそ為
つきあばかりばかり晴ばかり当宮めぐり侍るま
ううかうくしき神鏡と此道ばかり白門の間

後に二月の初の程にまた此方の那須と許橋
寄るまゝにて合戦をなすとかんの一向
に人のけうひ絶て那須のたけうにいとこうや
はたとなり常陸のけうひとめられん日数十日
そうにけりけりかんといふ日波の雨も程うら
けしかなくてけうかう堀をひきぬ門中門をと
いふ大河にも洪水はたしいとなくいとなく
なすかんいんも驚しかの津渡はかなく知ぬ下
けうは出けりけりとけりまるけりよりあとの遺恨
ともなりて
かう越てけうにもきさしかの茶とやうにて白門の軍

所にも古河の江春房の方人よつきて同日此方へ
のりて出て脇ふくにかくらる條余はうう
はくにかうにて名瑞の西法うの快然のかりひにき
ともけうにかう十二日宇都宮より又壬生へ向とて
芭雨風にうたれも笠も出ともかしてはかりにて
つきぬを東神ふりをけうにけりの小橋にて車軸
のごとく十四日午時刻とうよりはきりけうけり門
ともに洪水ちりき年ふいたくかふ名月とて
連句を催しまるかうひ絵句京東路向こうつき
はかんこいうくかはりもきたりての事ふたハ
月ふりひちりとうりきよりまるかし

半ば晴天の所なれども十六日より雨降り出でて山寺詣りの般若寺と云一所へ連参りの

庫の寺やそめたる紅葉の岸の松

松松のあるべき所を東へ十八日より綱重殿へ

かくて別れ申しみてみるいかなる山ひ神と成り

へて

年ごろ参りあらばやと思ひ来ぬれども

綱重殿の同年ごろ参りいでて申されしも又

り来たりしかども雨風やまずして

伏見へ帰りつきぬ鈴より来りつきし伏見宿朝伏伏

日風呂かりて夜雨風法のかをりしうし

ども人数多かりしそなたなる朝鳥鳥なんと

もて安星珠易かりしふ二神うまうは法をてまうり

出りしまかりて南鳥うけ和ごたん跡をて

遠く法山をもて法ごうたる里の名なる恵法く

ふかり中法ごん（ちゅうほうこん）ともも永まそ宮え侍る伏ふ

人々一宮法かりて

おもうけ分宮参り法

山伏丹鳥法ごうよめ法の振られて東へ永鳥の

名なんとふ里と小四のいとうけてき二神も馬と

あと出ふふそ同人もわとうまはるちまるり

そなたまちかく梶原五郎景政の鎧をこれも同
くらうして西海のうちに高名して親父に対面せんとて
寧ろくせをもてはまをけてこそ帰り侍りしう
又越前の幸まして連歌所
山松や秋のもやしはあらみたり
秋の鎧は山もとのうき林つきは秋魯斗笑
行見上野入道明見宗祖父年は知音なりし
人人四十里ばかりの程にて雨ふりかかる逗留
のうちとそきこえの此一座の中にてうら
しくおもひ侍りしてこそ音九山見の里竹澤山
地名高雨にて奥州

しるるもんはきの木葉の紅
兄のんはきうちの色をよそへ侍るとうりこ又鍛冶
幸まして
武蔵やうしくるへき下まみち
横手は鎌世此一座にも出会てうるへ参駿河にも尋
ゆきうる（きまし侍りしうい
永徳のうちの山の木ふる苔ふるる谷の細道
とそをしる　我田はたる大澤下結る高雨にて
草津湯治のまうのひ家にて六七日ほどあるべき静
寒にて又連歌所
うり衣きりやうき保元伊香保風

うの衣いろ深しといふ松風に藤のこゑとそへ侍りて
うゐこ越物象向のかけてはるゝ〜こゝ彼
岡静溢のかもゝ〜一人ぬけ出りして
五十句はく百韻ゆ侍り

植てうゑ結もるまやなすすき　静花
風こそ家ゆ庵の雪　はせを　宗長

鬢先寺にて言和ゆ院ゆ出て出下ゆ八駿河の
岡にて行ひ〜一人奥ゆ門前ゆ行海山のやうゑ
植ホし初しして世ゆ行造ゆ
ゆゝ年を世とゆん結の果ゆ
草津二百余ゆ十隔て大胡上総介館を一宿して

連歌ゆ行り

家の後ゆひりと第ゆ高の松
七月四日ゆれハ津ゆひりと待ゆ行ゆ〜〜待ゆ年と
ゆゝゆ野山ゆ年きて書柳ゆ里ゆ老ゆ行ゆほ
うハとそ芦ゆ〜〜此ゆ行ゆ〜〜ゆ行ゆ時雨
きてゆきうゝとなゆ〜〜ゆ蕎荷和家入ゆ高家
ゆゝとゆ立ゆ〜〜ゆ行ゆ〜〜ゆ行ゆ〜〜ゆ夕ゆれや
うゆ行ゆ〜〜ゆ高ゆ行ゆ〜〜ゆ行ゆ〜〜ゆハ
やゆゆゆ時雨ゆ秋ゆゆゆゆ
岡ゆ行ゆ行ゆ〜〜七八人ゆ〜〜ゆ入ゆ懐紙ゆ行
ゆゆゆ年ゆ家ゆ一宗祇周防ゆ国ゆ太宰

府へ相伴して長門の国より山口へ参詣し神宮
のそばへ立ちよりて時雨しより居る人の
宿所
宿所より雨やみしかば侍り會
とりきたりて山宿する時雨うか
此れのてまてはもしらすなそ
うたまつとて松田加賀守法躰して宗鑑
法十年ばかりこれいはうり侍り八九年の
きさのう宗祇此所にて俳諧法例
今河
志うしくてはて廿日ばかり医師親切の
たちまち侍る
雨の宿の兼

れば家ばかりうつい法ふかきる人き物兼て
きたるやとて侍るいとうそはてもなし
大内
大内といふ所海路三河ちる宿所に一宿して九月十二
日より草津へ渡り如同物ばかりまてる人
数おのく親切の送りもし草津より
ちる大内へ帰り出侍りわ兼約して一庭無物
時雨の八和歌の中は山めくる雪
きのふの和歌出侍る山中前後左右は和歌の秋の
奥斗なり可諍九月廿五日大守住例は法乗連
今依田中勢ヶ浦書之章宿して
第をきて帰らそふ秋のむかし

則懐紙と越後の陣てふんそまに並松別当
まして

色うへの松いくれ秋ふる

芝竹九月盡ふる神無月朝日よりなれ

又發句

神無月里やあらしむの声

此別当俗名野姓石上と並松上野国多胡郡弁
官府碑文銘曰太政官二品穂積親王左大臣正二位
石上尊此文系圖を布留社にあり　布留今邑
武の宮やあらしの石上ふるさと里と成ぬるあり
当月吳石山寺にて人てるとしむの声やとと

中之武物成田下総ち顕茶亭にて

ちかものみきくに雁の音世ふる

ちんそこ銘のめくり四方沼水茶ちも形く芦の葉

うれ女(オイ)時四方へうけて水自ほくに形うり

生るにまるくに同千句無竹中一發句

うきくさとりのふるやや雪ちる時雨

おれ一千句に人ちうりて

かきくきやにて形うる橋の歌半北月

杉平伊豆ちにて

年ちの雨いとれ沙りう

又人の不白をしく

おもしろしとの句を小雪ち下句なら
鉢形のうらうらして
秋をまん生ちもきるしたの子代
馬度豊前の重直奥州きさ州年
ぶり来るうれしてを賀し侍る計ら又一度
奥州後句頭方よかりて
ちし秋をうきもてなるや為ち
連句して酒ふくて東文侍るし高塚匡
留の旅宿随意秋といふまして
神宮うれをりし秋う宿の家
庭の家秋を沙ちぢまま第一鉢形を出ちて

須賀谷といふ小家掃部助の宿所一日休
らう人数ハ招くて懐紙表八句
をうきやや萱うの家の秋の風
むをしの家野中ぶ沼ふる一家枝の景をうら
ふしぶうの平澤寺まして
那河りう招ようこうの岩根水
庫ちハ不動尊池ちりまる松をうりわまくさ
松建七寺天源庵ハ横山嶽の開山大應国師遷化
の旧跡いはる五とをうりぶきぶ四祖方
唐領ふしも久しく知りしておりそふきうぬく
ちう紫野大徳寺京中半ひくちくぶるとい

ともなくて　ゆう雲　世界　なと　人多
年は知へそうらくよ　中津　ふ　そ　そて　江戸
は　鎖　六七日　おう　へと　速分　二百　額　ばり
京　さき　はゆく　四　霧　の　船　うる
を　山　ふ　ゆく　淋い　ゆ　さの　船　う　郡　上杉　建芳
言　いた　を　ふ　深　を　れる　こそ　れ　式
船　ふ　い　言　は　い　る　ば　う　ふ　あ　う　て　き　も　ふ　う
ら　し　宝　一　日　津　隅　て　ば　し　う　し　會　席　し　れ
い　う　天　深　信　領　二　箇　所　う　し　津　ら　う　へ　き　う　し　叢　東
は　ま　し　都　鄙　い　ま　は　ば　ま　は　ま　し　に　帯　を　は　事
船　へ　し　品　川　よ　し　津　る　へ　ば　う　和　泉　津　ら　き　て

此六七年ばかりとも　も　遠　窮　屈　五六日　休息　して
ばる　ふ　ふ　き　よ　海　の　ま　へ　ば　う　き　て　ゆ　り　て
ふ　ふ　き　う　ま　て　よ　入　江　の　春　う　ま　み
江春入舊年　い　ふ　句　と　ば　も　ひ　は　て　ふ　き　ま　る　ま　ま
ば　ふ　ら　く　し　て　て　ま　ら　る　ば　ま　ま　の　ま　安　房　上　信　下　信
光　の　ま　へ　の　ま　ふ　へ　ば　る　へ　安　房　ば　き　よ　ま　を　一　見　と
ま　ら　し　と　ま　ら　ひ　し　よ　い　つ　こ　う　ば　て　と　ば　も　ば　世　京
は　い　ま　ら　ば　り　江　戸　の　ま　て　ば　ま　と　と　く　一　都　し　て　ま
ま　ま　門　の　江　戸　ま　て　下　信　岡　蔦　西　ば　こ　の　江　戸　と　ま
り　ま　て　ば　と　ま　ば　く　ば　り　し　も　京　都　ば　ば　の
浦　よ　ば　ら　ひ　て　う　く　れ　て　ば　し　里　く　ば　く　ま　ら　ば　り

うも都なる城江こく行くらして今井とふ所
より舟にて淀川の辛濱迄まて沙人百人侍
ほく住持出てものうらうけ所に長句所望さ
よとかく書れて祇園さ出ちかう
なるしけ孫八郎さ歌書けり墨弐
方丈の西よりしうひむかしの書くりけくんて屋
くうりこまけ法橋の和うり中山法華堂の本
坊寺に一帯して四百一坊あるとうと長句斗
を所望こまうさて
杉の葉やけうしけ後の秋いけ雪
さけ秋の気けこたしかうしてきまてこふいたるはも

も岡さてかうしうけ浦まけめしけ原富士浦流隆
小弓は館けまへ濱の村乃法華堂本行寺旅宿
なり十四十五日本業け崇神所見の祭礼さて三
百丈けるとこ初め十八日い延年け猿楽所
入てこうさて十七日連句
梓弓いそへ人の実代京和の松
梓弓いそへの小つ詠こう苔世うけて行とまこん
此和方小弓こうこ家とくいて祝しけ行斗こ
所の歌い南い安房上総の山さうめて西北い海る
くこ入て鎌倉山桜さりけり不二けの雪さ見ふ
加ひて富駿河国さこうまうい桜ほこちけり

遠くてみるいちろき山ふもとへ　一枝は又遠方なり

發句流隆

はし〳〵の雲やあくまをの表

ふるうはるゝ〳〵風情玉拍子

庭ようのいちもの雪をはらひむ

發句は景氣をつきぬもの也　はるかに

ふかい一庭も春のくとしてはるうるる拍子

拍子入て是年はあさ流たるきう共余人あきやー

ちうへまひるる仏像おもしーつく作つきは数そひ

百年ひ形ちう性ちうとうて味ちうくるりぬこう

おはるてるる一一又演の村本行寺にて

春を一一月やしほひの涙ちう

流隆此年三路の形ちうゆきー一庭ゝ少うて雲

年ひくゝゆきてとあといひてそちう年ふふ

月ちうのるはるを京くゝ立ちりー長祢ちもぬ

光のすきひく

おもひ出も孫の祝をはちもー河舟なたそうし光の白波

はひきうしゝ人のかゝへはうきる中津うはうる

ちまはは村をきちて宮みはいはの浦風はうり

烈しうしうしの八一帯してはいまは日ゝ光ちてはちよ

人ゝ物語の席ゝ一杯ちのことのて

玉うしハ岸よりかもをおくるる

可臨新所にまてうち送て藤沼の新くはめとうくは

しと翌日市川といふ新宿風雨きて

志りしらぬ間にむうひの里よりいひはなる人をて

ちとせやうて和河して竹の根茎

の言うちうひ善光寺といふ茶つきあるまうち

里に新あるに此あハ炭薪ふとまれて芋を

新きき豆腐とやきて一盃とすめ〜い都の柳もい

うてとうふ豆うんとう無ふ入作〜ちふの等程ふ

會田澤山忠定宿の茶屋にて夕めし茶漬もをち

てとて新更ぬ明日廿五日にて速分の信〜ふ

姥新此ハ新うれの山新う郡

市川陽田川ちうち中の方ふ大塚四まうめうて

ちうしも言ありて山新とりかうしく江戸

ふ帰りつきて又の日鼓うて

月や江ふうち波きむ名こうり

廿八日品川へとて関ふ藤沼の古梅新一新のう

ちうと後ちううて

此きそうり去をもちうも梅の花

此新号ふうへて待ち申ふ品川ふ西日行とや光光

きちうもといふ里行り諸西集人作沼茶一沼して鎌倉

ちうさ行うう世蔭此新左五 光吉沼西ふ一日めを

於ひて遥留

梅の香や芦垣のちるを惜

門まで汐干しぬらん人の跡

きぬ汐形のあとに今月九日天源庵にまちうけて

侍りし修理のことの心いきをあらはすなり浄光

明寺殿中意恩院にして

風やみて梅のこずえに松の雪

掃八建長寺永明軒にて和漢一折侍り

うぐいすの初ねをまつ梅の花

南寺天津橋ふるのてらを斗かな

永明

對雪水仙王

吉日明月院奈洋の次漢和侍りし席

客若花見賞

狩数篇稀退耕いへども意味永許

ひ年ものうき松の雪あるを

藤谷宮内少輔仲次一会興侍り

東宮とうい色うの落う園の松

南社畢東のるるるるるるる

かふ一十二月ちるめ鎌倉てのことをうけやうと

かきこうし侍る事のうるるる

右東路の法光以藤野章甫本校合了

天保四癸巳年秋九月十五日於八代縣高田庄
上松求麻村奥山中書写之

中村直衛

紀巴富士見道記

今年永孫の春も十ヶ初の頃なれば
富士見る一紀事と頼みて思ひ立ちぬ
ゆゑ伏見より都へ出で給ふ中も不
る行末まで頼む所なり奈良より京へ都まで
一首なりとも思ひ深き橋立の浦鶴ヶ崎
ゆ美めて定めなき所もなき内裏
江村光次興行

春草はうへ八津まで卯月の雪

帝に連る曾谷原敬濃州を発ちて
まくらとりかへ今日関は未なり

いつの年にかありて賢くも聖護院殿開ーうきたてく
大ひえの春うへ[illegible]ゆく富士の雪
[illegible]二百額可[illegible]
春来てや[illegible]人をまつ山櫻
御入寺祝[illegible]
胡蝶の[illegible]風[illegible]色[illegible]やうきの郡
廿九日従殿下[illegible]可[illegible]氣色[illegible]
[illegible]
春[illegible]日の下草[illegible]色[illegible]
[illegible]入[illegible]孫[illegible]殿下新御[illegible]様初[illegible]
[illegible]
宇治のまきよかつ[illegible]
[illegible]八踊[illegible]
明日[illegible]山郎内[illegible]遊日[illegible]
桜[illegible]
四月[illegible]
色も香[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
七月小[illegible]故三条西殿補[illegible]院殿御影前[illegible]休の印
古道[illegible]

馬場殿清とて義人有三年法師のさうり風雅執
心とて抽丹をもはらうるこゝろざしとハ
秋ぶかの會小

松ゝ蘿紫ハ秋の物とかゝ

うぶ人ゝ俗光ハうへ袖も豪奢袖のもちゆ
草ゆり青ゆを胡蝶もとゝ無贅素とゝ誘ゆて
ゆる袖のもちゆ浦も宮とゝうゝて黄花ゆは
立ゆゝ櫻の御馬場ゆく盃とうゝ猶冠ハ
岡山ゆく有ゝうハうへハとゝかゝ先ゝ
ゆて祇園ゆく笠もとゝうへゆ物ゆぬ今日
ゝも中ゆ日也 富士演ゆ也 但落事記不詳併聞ゆ

文ゝ神前ゝて觀世京都岡崎とゝうゝ
ゆゝゆゝ高砂ゆ未とゝ祝ゝて物ゝ坊ゝてゝ酔
ゆゆゝとゝゝハゝゝて月の樣ゆゝふゆゝ
ゝて人數舊詩ゝ柱の枝橋ゝて宗祇在京のゝ
先住ゝ不ゝうゝ紅葉ゝて酒者ゆふ大津馬早ゝく
迎數ゆ書ゝゝゆハ何ゝ紅ゝ物ゝふ若ゝ人ゝハ
栗田口ゝゝ物ゝて祇ゝ松坂ゝ云ゆ後ゆ年ハ
第ゆゝ賞ゝ栗馬ゆ井ゆ高ゆ相坂ゝ云名
沢岡ゝ酔ゝ醒て月光院ゆ僧正の室ゆ入ゆ
十一日ゆ夜晩治和尚名ゝゝ法ゆ音ゝ神賞せ
胡の賞義法坊ゝて時源ゆゝゝ記光坊

国蔵坊のく清水ひ開の清水ありとて行道す
う舎も新々有へきなれ紛れもなひ〳〵貴く
發句ときとゝ思し故
関山や坊ゝ清水の郭
進發城より新たに出て茅ヶ崎院を過ハ
千鳥の濱行ひよ行ひ〳〵栗澤久留院を過う
主なつひ駒も嘶ると野辺送り笹原人とゝひの合
〳〵新山世尊院一首寄み着せ人くめく来る
向ひ〳〵に舎なとも並てゝ〳〵思ひ〳〵方
和なるゝ物狂しき様なる坊ゝ寺ゝく十二年
菅金蓋宗養子岡吟千句ゝ〳〵小獨吟也

別なるゝ行ゝきなるゝ思ひなを八秋の落ゝ紅
月覚の事も昨今行ゝ賞ゝく
秋ゝ月ゝ〳〵影清ゝ澄ゝ郭
又行ゝはゝいひて三井寺新寺別ゝ
光浄院ゝ国蔵寺外ゝ道ゝ人ゝ行
なるゝとゝ行ゝ寄道ゝ人ゝ〳〵
ゝ世なるゝ塚田山園御寺郭ゝ月ゝ人ゝ行ゝ
思若人ゝ山鷹ゝ人ゝ馬ゝ〳〵郭ゝ術
ゝく人ゝ世尊流道九ゝ〳〵ゝ郭ゝ
帰ゝ入ゝ浜行ゝ〳〵ゝ光浄流の發句新鶯
枝ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ川柳

舟を浦に漕ぎ出だす日も入方に成て水の
構へ差しつめ二百余人の武士共
の網に登蓮法師が為に打ちぬ
小威徳院を向ひ奥州の舟を
日より光岳和尚七回千句を
給ふ
和と今日法を
茅子平井加別当威徳院布施新義入平井駿河
ひとりと合戦事
己酉出羽の
構へ肉為の寄
庭に四人今十九日
於出羽
卵を別当
威徳院絶
布施
いとりて
行す
明年八時
十年
己酉出羽の国の住人佐藤兵衛尉実元謀反を企て
構へ肉為の寄せ手に加担の現宗元性生の
庭に四人今十九日の未の一人伴ひ四郎ハ
於出羽
卵を別当
威徳院絶
布施
いとりて
行す
明年八時
十年

道場法師うたよみける

ぬまもくぬ雲や一夜はかりの時雨

見ぬ人に見せはやとおもひかくれ観道坊の蓼所の前くれ

野とは分ぬ蒲生兵衛大夫智閑寺祇園侍文古

今はかりとなる年は結りく興行ある人きの祇八

めくりあひぬ種子紀里一郎盤

鶴男鶴丸代及深秋まくに出長庄行りく船とう

くらたひるり望湖京祇仁和寺とる所まく

春半ばの柳さく深山とか

ゆりしはの木一見て行く

春半ばの柳さく山里は毒か強る人の世

と口すさびく帰りて買秀河内まく送り法

布施貞友河井利康と三別甲賀頼宣とる

法ようの秋宮の前と思ひあるる三躍の作り二町

計さうして法康の御前神さひきると作てた

らへしる俳屋の柱に書付きる

婦りたくく寄さり世八法華山鼠小法華とう酒

一里ばかりにく弁ケ天川と隔く有俳成その九木

梅妙寺小故る年思八人きる岡社岡社

地蔵とて行基菩薩の作業後小梅木とる

古木の思や法康の岡るる年の定家の哥梅

有るとにく女宮鷲山正法寺岡氏郎大輔何年

岡山本願の地に清庵和尚第大德寺大顯和尚
御開基にて帰雷寺に住す六百年の末裔色音寺
[illegible]後の山に金剛山[illegible]
[illegible]羽黒影向の[illegible]
年[illegible]
[illegible]羽黒金剛[illegible]
[illegible]霊雲見桃[illegible]
[illegible]寺外の[illegible]一杯[illegible]
つきり和尚所望
[illegible]
有物軒[illegible]中[illegible]
伊[illegible]雷[illegible]

[illegible]山[illegible]
[illegible]九日羽の[illegible]山[illegible]
[illegible]峯[illegible]岩の所[illegible]
[illegible]岡[illegible]
[illegible]稲生蔵人[illegible]武鈴[illegible]毎日一杯[illegible]
奥津船庭[illegible]
羽[illegible]白子観音寺[illegible]海[illegible]
浦[illegible]寺[illegible]奥[illegible]不断[illegible]
後[illegible]春[illegible]
満[illegible]清滝の[illegible]
[illegible]舟より[illegible]
神戸蔵人[illegible]

末なくせきやし妙なん園の桃
七日は神言かして来る名あわ西川清寿あ六下して
与行　河出郡
山川の先を探る回逅す旅柳かな
七日雨に漂りて明日朝阪りの千歳の末々て高
田孫にて盛さしかりして別進ゆく袖濡らくく大
福田寺まて来る見ぬ業居ハ去つ喧嘩して把ひを
よりて月を道善の宿に入りけるに八舟行まてして
尾州へ行かぬ熱田より川面往逝ぬるもかり
行かくかせり本府を以て新かく清須より小牧へ
付候に明琉を見てより無物なし国塚にいひをう
さもあけるに先つも飛柳かしとて義之なと構まて
迎へし院ハ去りて旧識々の諸の故郷の内まて合寄し
て旅の宿ともきゝにおもしろ風雅よおもろ深ね
人さへ志のひくくハ春の日秋の哀よ思ひおはまる
書さし洩し　法師なとは發句かくこえなん
かし　於妙廣寺
咲ちるもしらぬハ花のあるじ哉
於養光寺如来別當可休
庭や河春雨の露のたまり水
於蜂屋兵庫助頼隆
待おしむうきや半天春の月

於瀧川右京進秀景
[illegible]
賀嶋順親奥行
[illegible]
松田直清行
[illegible]
於大野木義元
春草[illegible]
於神杉寺 天神社僧 [illegible]
春澤[illegible]
大野俊秀澤行
[illegible]

山[illegible]
三月晦日 堀井貴[illegible]
[illegible]
印月言
[illegible]
於天王坊白山社僧
[illegible]
於賀頼寺
一[illegible]
於大寺新[illegible]
[illegible]

於赤下助左衛門方

[illegible]

富士一見之後発足して海道を西へ向ふ

[illegible]

森鳥見仰所望同和

春秋の花や其跡の草の葉

丈六寺金春大夫勧進能芝居より九体松元院

[illegible]

御送り被下申候妙国寺宗直[illegible]

日数[illegible]

碎[illegible]明日の[illegible]

蜀魂声うとうとして門の外

世間[illegible]

十里[illegible]

[illegible]山[illegible]

[illegible]河の[illegible]川と[illegible]社福寺[illegible]

風[illegible]

丈六百長樹院[illegible]

板[illegible]

丈七百小橋[illegible]尾別[illegible]

[illegible]

叔父の例杜若抽んで長く成り茂りて花を杜若と云ふ
故句にも杜若と云ふ也

杜若の花咲くころ尾州熱田の海辺
花盛り迎ひ馬とやらで年時を経て年時を経て
ぬ今日は発句なく無約を又尾州に三井の玉
林寺御細の故なりく山橋と云ふ塚にて興行
をなすとく所望し

時鳥ゆさゆるとも旅の宿

筆の行方を手出九日曲斎にて少橋の
杜若断絶遺恨と歌を代官所数百十和田
行くく小橋西馬場と云ふ在所にも侍る樽添に

人の古先祖を知りて可杜若と云ふ
法国の旅人根絶引くく行数論も言とく貴
もく出人を代橋杜若人別を絶なく見えあり
西の下馬宮と云ふ代杜一切なく涙の半に時雨
の雲と云一本を胸食ひる雨滴の如き雨
あるも石橋の八業平は宮と云ふ在所の人
杜若と知りなく杜若と業平と
答ふる四と則今なりして杜若寺にあるを
あるく年紀寺永代の折紙書て石苗と引きて
手たるく杜若して石橋の人あり西の橋
家なるり中小枝なり形なるを法なる小枝

鍋を入れとりおく貴船神社へ長谷寺へ
一泊のつもりなれども雨もよう橋もう川上の
方へ六十町を隔てたる[illegible]也御渡を
くぐり庵に仏道をもとめる人なり帝御願寺一
年ぶりにて御在国新地の宿へ入端午前日
石川日向守異行
くすだまつり菖蒲を刀鞘に結ぶ
六日入鳥井修賢入道幸ぬく
夜うちぶりにて[illegible]ふりぬ
菖蒲の席先達の作意名残をうつす宵雨の
風ハ小門を入洗ひ[illegible]御[illegible]
今夜ぶりに雨上りの入道[illegible]国
吉田と云ふ家宗御井菖蒲川風呂に入山
海景二階にして御酒等[illegible]
味一日ぶり八百丸門外に清水一杯無
水ものも[illegible]菖蒲に線引
九日小仙庵ゆき二村山を御中ぬけ竹別当
坊をいとまくりて白雲演花橋の竹篭
きを[illegible]ぶりして宮古見物ゆき
うちとく道も覚えず口清の清水へ河
丸着く暁より雨降ぬ天龍の渡方殿浦
尺付を宝をとくより船渡の事義角

負まかりしむかしの唐の淵もあらしと聞えて
菊川の里にかゝりし頃は明方の清見か関の先より
行て日坂にいたりぬ南山の古蔵ともいふめる小
夜の長山とし上りぬ雪舟大慈和尚関巻一字
影菊主寄て独酌盃面に祝句なりへるを賀して
書付ける
字ならぬき山もうみし鞦く猶甲斐か子にみえぬ若菜摘る
葉つし菊川と云は名に負ひ茶成をわらくもやといふ
前なく大井川なとも人をわたらしてくたりなるに
小夜の中山長山とうたへるもわするは八二三里ほと
山はいにしへ一文字にしてさほ山は彼岸にかゝし也貫

之大悲記にしるしたまへる男山と川尻より
見てゆきけるも理也鴻田といふ所にかゝる菩屈
ね宣ありし宗長出世の地ときゝて立寄り宇
津山にいたりぬ我いつれの道といへるは蔦
谷といへるかはりし今は筆に付て登りぬ洲の
蔦楓は散り木の下にかくれ右の方は余波の神も
すゝみしほとに右細して里に清き宮の戸
をれ鳥の子を十つゝ串にさしてあるも何処
しれ名物也（俗言に団子といふ）団子といふは和尚の吟し
津ゝわりとも細く丸めたる里に見ぬわりしたる
みやまきあん団子を和して此下の家とやしなん

[illegible]ひらく宗長山[illegible]の[illegible]
[illegible]所[illegible]せし一冊筆[illegible]
[illegible]一町余り小川を隔て別墅を[illegible]
[illegible]禅寺と云ふ[illegible]小僧を[illegible]
[illegible]ひ[illegible]道[illegible]半より栄[illegible]ゆり[illegible]
[illegible]あひ[illegible]ふ[illegible]
[illegible]庵室と見[illegible]
[illegible]と古文字宗長像[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]水[illegible]
[illegible]

院殿御[illegible]二首[illegible]自筆[illegible]
[illegible]石[illegible]宗長[illegible]
[illegible]
天柱[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]小府中に入十三日[illegible]
長善寺一花雲山号御住持[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

年ゝくれも世のなく過ぬるは節を遊びける
大ぬえも暮やいまそし富士の雪
十四日よ一ト村の出興行致し入て旅店ヶ帰ぬ江村
栄氏とく都よくの陳草玄人本寺来りとて
くまりける東郷よりよりうまに出会りをり故郷
の人伝して十八日三嶋の宮参して
移り明神の御の残り滴と京氏数多の見物の宮に
池の天人の衣ろ雨の妻の絵より礒偽ひし村松と
いふ所へ入りぬ原ぬ所よりて馬あり神の旅とのへり
お里中とハ旅を雨り院内にて當所人等東谷和尚
作りなきあるにて扇く排時あり路傍しとめ

らまきりに清見寺月航和尚より出使にくまつち
山紙充事とりまハ西御卿陣内りと打掃して神
しの浦とまさりの所より海士人の墓田河原
庵りくより大宮より入小敵父て苑尼のうふ露
老和尚よりつり持ぬりハ漆和一ト村によて旅ね残
晩の月よ起居礒の人行りのふ蒼のえ院宮の出
庭とつらふきいろうく浜面清く富士の南よ朝日
も伊豆三嶋の北雲の見るか山浮鳴京より出方内
子の浦さへりとて調理りぬ杖ぬひし去りえ
の濱と海士人のいふくんも実わりまろいハ岩本の
山をと旅しかとりひて寺よ入ぬ日なけて門外に

かたらふ社中を先に立て千深の岩間に
山吹強りたるうつくしく雲うつる海の面もかの
天平曲かと捨てもせぬ花の別れて唐土
書してを帰たる共日下 大寺へ御礼ト共一百
於二条西度出張
消々と奴道を強もる義野の郷
共二百二条度へ大寺度御手にて御ようかたる
川きと有りもハ紙さへ京人高名に石祇共宿名号
百韵三条殿々御興行 大寺 御帰
興行 大寺 御帰 晦日朝比奈の野寺
能問々奴 桜や 年代記 石井

六日 一乗寺 貴御興行
風鶴々 蓮ハ花の車の郷
七日 富士 御同社 新宮度 して
義 七日を張 ト や 兄 ら 富士 ト 雪
八日 清見寺 より 佳詩一章 唐 ゝ ありて 今 一度ハ
三穂 ト 書 ト 御 ハ 湖 ひ る 無津 入道 牧雲 ト
以 人 八 清見 の ゝ う り 知 人 ゝ り ゝ ハ 宗長 の 前 て
う ゝ ひ ゝ く 数 書 ト 今 ハ 像 ら 寄 る て 雲 深
ゝ 能 の 書 も 所 ゝ 入 ら 物 語 ゝ り ゝ く 芳 御 張 行 る
ゝ ら と 義 白 和 尚 中 新 宮
月 清 ゝ 御 ゝ や 清 見 ら 機 ゝ ら

[illegible]入く[illegible]る日[illegible]午時[illegible]船数
[illegible]海士入[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]や過ひん[illegible]の都[illegible]月[illegible]
[illegible]海地盤に富士[illegible]雪[illegible]頃[illegible]く[illegible]
[illegible]く[illegible]沖中[illegible]ひと[illegible]
城の下[illegible]十日興行[illegible]

[illegible]茶ハ富[illegible]
山[illegible]ハ[illegible]く[illegible]
宗長[illegible]雲の古[illegible]
[illegible]の[illegible]の文[illegible]
[illegible]の巻物[illegible]
[illegible]世[illegible]人[illegible]物[illegible]長[illegible]

[illegible]十日興津河[illegible]
[illegible]函谷関[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]前[illegible]
[illegible]富士[illegible]

和尚山脚

板軒掃部埃

一[illegible]江川[illegible]近国[illegible]名海[illegible]今日[illegible]ハ府中
[illegible]国[illegible]味[illegible]旅[illegible]載[illegible]
[illegible]
[illegible]奉[illegible]脚[illegible]葉[illegible]

鐵鶏

筆とりおさん都の考甫して宗長旧識り住ける
遺跡十二月に與けの事かきたるハ庵内し入る
詠ちくも風うらし江庵の柳
上下おうろ終会せる事席と見えたり十二月ハ西
歌人百を集めて桐[illegible]太守より嘉肴江川魚なり
とて此家にして[illegible]のわと終忘年[illegible]秋下[illegible]朝
まる[illegible]大黒天子見[illegible]賓客也須會席
ありぬ日に祝[illegible]しているとせ此旅の会りを志も
ありぬ道遥院殿の此編録として此作意池の波と
く由世るは稱名院殿より和漢有職の家と
せる物ならし[illegible]しる[illegible]御年まて[illegible]ハ

年を送りせる剃法氏の理[illegible]の事を文せし
類ひ[illegible]年く[illegible]ける[illegible]
聞ふ不窺由別とは[illegible]かく[illegible]
[illegible]るを知る[illegible]稽古の二字[illegible]
[illegible]守は紀綱とよんでも[illegible]
孫の末宗祇の名字の人[illegible]
稱名院殿古今集號深[illegible]文字とゆうさせる[illegible]
後やうて并せあひしくハ伝受とハ東雲院殿 逍遥院殿 大内大臣
ようつさうき事あり[illegible] 月[illegible]
あり[illegible]志りうし 冨士[illegible]嶽ハ[illegible]
もちりし 三条殿名高き[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右色八種〜置之形

義好日の義〜風の風〜郷

所ふ〜〜席りぬ面〜好程〜第も法ふきみ法寺

〜〜御面形様の事宗祇書妙宗長松友盃翌

日法會席半〜御手つ〜〜て書色のひ千鳥〜

いふ書作銀物作人郭忘〜〜〜九月〜いとりぬ蕎麦

祥英面坊〜日〜に第〜ゆ〜思〜〜事〜八一月〜〜ひ

夕〜其日八為好〜所〜以山犬人成法〜〜〜〜

運〜〜寺中〜〜明〜ぬ旅宿〜〜〜〜〜郷

川ふて〜寺〜明〜〜〜〜〜

秋とさ宗祇ものぼ[illegible]
[illegible]百[illegible]山村修理亮[illegible]
[illegible]
[illegible]

帰て[illegible]より[illegible]より[illegible]へ[illegible]十首[illegible]興行
萩はらの山下道や須磨ごし
英者金殘て十首一篇英鶴とうらいひ教
用めて須磨の月をイ盃策盃は手向とハ又りや
めてせう備前より対屋へ舟十二艘ゑ打篭とともし
風流とうもの河内[illegible]奥都ゆて八月朔日事たこ
十六日晴の[illegible]初まて[illegible]新へ組ゆうを
うるめうつすへ[illegible]ハ行ゆるめつうしけゆる
屋さしゆるゆ[illegible]いひゆる
[illegible]
又二[illegible]南ゆ[illegible]三熊野[illegible]山へ[illegible]

潜ゆく大演稚[illegible]ゆ[illegible]の新[illegible]
三熊野ゆ浦風冷し秋の海
十七日ハ[illegible]野別と興行
流を来く一[illegible]ハ千船の邨
十八日[illegible]助十郎[illegible]
[illegible]秋ゆうゆ雲九色
十九日[illegible]竹内法印[illegible]海を[illegible]
を加ゆ慶忠小[illegible]酔[illegible]船[illegible]
く[illegible]川[illegible]ゆ[illegible]
[illegible]ゆ[illegible]百[illegible]
大[illegible]撒[illegible]

参りて送りのみとりて遠江橋本より八幡より船
場町にて三別れ申候望月右門参別墓行
浦風松まつの墓所に墓参り申候
其日内藤氏墓所に行き八幡きをお陣の前日初七八
海中に浦物を集め申候辻堂に辻堂八の
志ありて覚仲の八周忌老人に伝ず宗教度く
ゆうの為に後所とて上句を百ゆひ湯風呂
音外行ゆくゆく八祝行ゆ記申ゆゆ山へ参り申
其日お出陸地野辺
鳴くくもゆひく音周の朝戸り申
遠京唐信ゆゆ八月とゆゆ七日小倉遠信備来相無申

舟に入申候ゆ風ゆ朝凪
満潮著くゆゆ舟所に戸を流ゆり其八
日ゆ八周忌ゆゆ海へゆ所に八馬ゆく
ゆゆゆゆ圓浄坊速ゆゆゆ茶の湯ゆと
入ゆゆ海ゆゆゆゆ取くして船ゆく大町余り
ゆゆゆ赤間場ゆも演底芸を浦て物をして太郎
所為ゆゆ藤書流を携して遠三海ゆをし
ゆゆして赤相ゆゆ行ゆゆゆ熱田ゆ入て京
ゆ行八加茂全明騨河へ下りゆ紙延行て会
て度くゆゆの行き申也
霧ゆけ八和ゆ紙ゆ人宇津ゆ山

二日ゝ法宗長老来宿とせしみ滝坊おく
宿ゝゝもゝゝゝ

宗長道記に入る行脚にいそがしき為の執心
ゆゑに如義尚書助駿を
こすめしに辞せず後舟に家て尚書助庭を乗入
上洛し給ふて京文てう高ふ百ヶ寺仏像
を拝て堺と祇園四ヶ所と山科めぐり石山拝ん寺住吉
堺の事ども所望に応じ初一念と
望遠ゑ所下も祇園ばきはめる成
夜入て淀瀬をたどりとりて横新橋かゝり
此若八幡宮の北柳嶋又宮にて京にて三条川
祖母丈六像あり十二日嘉祐寺日蔵明院ゑ社僧
無月日本武尊東小て向大の時極を崇神の行迹

七社一迹神秘略
いかの川原は宝たらの光の邪
持宝坊にて行者奥行
剣しく晩月や 雲の秋
嘉祐と海者中人夜成る者二百翁之十百ヶ阿波
手の森門前の妙勝寺奥行森の東ゑ天満宮拝又
森ゑに社あり 去下殿 香のそばに入し 親行
野分ゑも 行ゑに 衆の初極
名月ゑ淀津 西一見ゑ 行ゑ成 坂井助左衛田
中に楼木と打ち色ゑと 祇園 持ゑ祇園ゑて 高殿と
尋入て 悪者行ゑ人ゑて 社頭へ行して 夜文行ハ

橋のうへ[illegible]辻中に相
国とかう都をそたちし今宿所
宗教〜国源〜ぬ人〜く都は修行者とへぬ者〜
とかりの〜成長鴻一向会佛坊主塚駅〜庵別大寺如律な
き八甚因寺仏玉〜〜〜時雨〜〜〜〜〜中
会〜はめ〜〜馬かう〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜入
〜仏未いかめとかりひ〜〜〜ひ茅舎解かく仏庵
川〜会覧来〜〜紹〜那は人の〜〜〜文〜〜山
傍塚〜西林寺来〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
昭都斎〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

の舟二艘〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
大高〜〜〜塚〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
桜風の里禁八仲須の須〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
夜半過西〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
明〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
半〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

所門前重阿弥桐八棚より送る也曙九淡と者
棚に着うふ尾別の元勢言うあてといひ作うへさ
そうしたハ中ゝ也春とうしに河ゝゆ沢山と
いふ会りうゝ共二百度利ゝる河曲郡郡ハ
烟のごとりぬ儀御ゝ云ハ甲賀ゝて九大郎知行ハ
ゝ南り尾別まゝ連斉執ゝ遠ゝ有ゝる祐
運駄ゝ也ゝ送ゝ人ゝ而ゝ送ゝて永ゝ人ゝ利ゝる前
越前ゝ道芳墓ゝ浦ん人ゝ有也
共ゝ日三井寺ゝ参ゝ行ゝ報ゝ坊相坊ゝ者春とう
ゝ人ゝ行ハゝ遠ゝ有ゝ也八後口前
ゝ而稚ゝ共ゝ髪剃ゝ人ゝ徐ゝ共ゝ有ゝ

七也
旅ゝ宿ゝ有ゝ人ゝ送ゝて人ゝ有ゝ相坂ゝ山
不定世界ゝ有ゝ人ゝ丈七百如意嵩越ゝ郡ゝ
入ゝ人ゝ世ゝ人ゝ有ゝ者ゝ有ゝ日ゝ有ゝ人ゝ
ゝ人ゝ有ゝ共ゝ西僕ゝ行ゝ時ゝ
吳服ゝ有ゝ者ゝ主ゝ昌ゝ郷ゝ者ゝ
ゝ有ゝ衣ゝ有ゝ者ゝ
ゝ人ゝ

永禄第十七月廿九日終記之　紹巴

右紹巴不盡見記以一本校合

天保四癸巳年秋九月十八日於八代郡高田手永
上松求麻村中津道奥山中書寫之

中村直衛

群書類從卷第二百廿九